

# 1960年代から1970年代の子ども文庫運動の再検討\*

吉 田 右 子\*\*

本研究では1960年代から1970年代の子ども文庫運動を分析する。子ども文庫活動は子どもの読書環境の向上を願う母親の要求を出発点とし、そこから派生した公共図書館設置にかかわる住民運動として1つのムーブメントとなった。文庫活動は日本独自のユニークな文化運動として発展を続け、全国に3,000以上ある文庫はわが国の児童図書サービスの重要な拠点となっている。本研究では初期子ども文庫活動に3つの時代区分を与えた上で、文庫と公共図書館の関係を整理する。そして先行研究が図書館サービスの存在に拠って文庫をとらえてきたこと、さらにそれが文庫研究の範囲を限定してきたことを指摘する。さらにコミュニティの読書環境を視野に入れた研究を進めていくために必要な要素を先行研究から抽出した。(1) 既存の読書運動との連続／断絶、(2) 石井桃子『子どもの図書館』の影響、(3) 文庫を担う母親のとらえかたの3論点が、今後の文庫研究における議論の手がかりとして引き出された。

## 目 次

1. はじめに
    - 1.1 研究の対象
    - 1.2 子ども文庫運動の活動記録と調査
    - 1.3 子ども文庫運動をとらえる視点
  2. 初期子ども文庫運動の歩み
  3. 子ども文庫と公共図書館の位相
  4. 初期子ども文庫をめぐる論点
    - 4.1 既存の読書運動との連続／断絶
    - 4.2 石井桃子『子どもの図書館』の影響
    - 4.3 母親の学びの場としての子ども文庫
  5. おわりに
- 謝辞  
注・引用文献

## 1. はじめに

1960年代から1970年代に子どもを持つ母親が

中心となって進められた子ども文庫活動は、子どもの読書環境の向上を願う母親の要求と、そこから派生した公共図書館設置にかかわる住民運動として1つのムーブメントを形成した。現在でも全国に3,000以上ある文庫はわが国の児童図書サービスの重要な拠点となっている。社会制度としての公共図書館が1世紀以上の歴史を持つ欧米と異なり、日本の読書空間は公共図書館を含む多様な文化機関によって構成されている。その中でも子ども文庫はきわめて重要な役割を担っている。本研究では初期子ども文庫運動の社会運動としての特質に着目しつつ研究枠組みの拡張を検討し、今後の子ども文庫研究の方向性を提示する。

## 1.1 研究の対象

本研究の研究対象は、主として1960年代以降に設置された家庭文庫・地域文庫である。家庭文庫は「個人の篤志家が自宅を開放し、自己所有の児童図書を貸し出す形態の子ども文庫」、地域文庫は「地域の自治会や町内会、PTA、有志グループなどが組織的に設置し、運営する子ども文庫」とそれぞれ定義されている<sup>1)</sup>。しかし実際に文庫

\* 2004年4月24日受付 2004年7月17日受理

\*\* よしだ ゆうこ 筑波大学大学院図書館情報メディア研究科

の現場では、両者の区別が困難であることが示唆されている<sup>2)</sup>。竹内は文庫を「(1) 親(たち)が地域の構成員という立場で(2) 自分たちの時間、労力、経験、知識、経費を使って(3) 地域の子どもたちのために提供する読書環境」と定義している<sup>3)</sup>。本論では竹内の定義に従い家庭文庫・地域文庫の両者の総称として子ども文庫という用語を用いる。

子ども文庫の数は1980年代初頭にピークを迎えその数は4,400以上に達した<sup>4)</sup>。少子化のため減少傾向にあるとはいえ、現在、子ども文庫の数は全国で約3,000以上にのぼるとされる<sup>5)</sup>。

## 1.2 子ども文庫運動の活動記録と調査

文庫運動にかかわる基礎資料として、文庫活動に携わった関係者による活動記録が数多く存在する。児童文学者石井桃子が自ら主宰するかつら文庫の実践記録をまとめた『子どもの図書館』(岩波書店、1965年)は、その後の子ども文庫運動に大きな影響を与えた。また『文庫を生きる』(東村山市立図書館、1978年)など、当時の文庫運動の記録も多数残されている。さらに児童図書サービスにおいて指導的役割を果たしてきた小河内芳子、松岡享子、広瀬恒子らが多数の著作を発表している。

文庫活動の全国調査としては「全国子ども文庫調査」がある<sup>6)</sup>。また財団法人東京子ども図書館では、伊藤忠記念財団との共同プロジェクトとして、「子どもBUNKOプロジェクト」が3ヵ年計画で進められてきた。このプロジェクトでは1960年代から文庫活動を続けてきた全国の文庫主宰者へのインタビュー調査を行っている<sup>7)</sup>。また小木曾眞が名古屋市を研究対象として精力的に調査を継続している<sup>8)</sup>。図書館設置運動についても文庫活動との関連性や運動の歩みを記録した多数の文献が存在する<sup>9)</sup>。

## 1.3 子ども文庫運動をとらえる視点

文庫主宰者や全国の文庫の実態調査にかかわった関係者は、文庫それ自体に焦点をあててその独自性をとらえようとしてきた<sup>10)</sup>。一方、それ以外の図書館関係者は文庫を図書館サービスの分析枠組みのなかでとらえ議論することが多かった。そ

こでは常に図書館というものが文庫と対比的に、あるいは文庫の延長線上に位置づけられていた。だが私設の文庫がきわめて短期間に作られ地域に根づいたという事実、そして子ども文庫の誕生から40年以上経過した現在も全国に3,000以上の文庫が存在していることを考えるとき、子ども文庫を図書館との関係だけでとらえていくことには限界があるのではないか<sup>11)</sup>。

日本では公共図書館を含めた多様な文化施設や文化活動が読書空間を構成している。子ども文庫自体をコミュニティの読書空間の1つとして掘り下げて分析する必要がある。

本研究は上記の問題意識にもとづき、既存の子ども文庫のとらえ方が限定されたものであったことを指摘し、初期の子ども文庫活動の中から文庫自体の求心力を明らかにするための手がかりを探る。それは今後の文庫研究の分析ポイントとなるものである。

## 2. 初期子ども文庫運動の歩み

ここでは初期子ども文庫運動を3つの時期、黎明期、萌芽期、発展期に分けて概観する。表1は初期子ども文庫運動および同時代の主要な事項を示した略年表であり、表2に全国の子ども文庫の数の変化を示している。

黎明期の文庫には児童文学者が運営する家庭文庫の形式が多くみられた。1951年から1958年にかけて設立された表1の4つの文庫が中心になって1957年に結成された「家庭文庫研究会」は、家庭文庫の連携と子どもの読書についての共同研究を呼びかけた<sup>12)</sup>。一方、1953年に児童図書館の調査研究を目的とする児童図書館研究会が設立され、児童図書サービス全般にわたるサービスの向上を目指した。

1965年には後に子ども文庫運動の最も影響力のあるテキストとなる石井桃子の『子どもの図書館』が刊行された。同書の刊行と前後して各地で文庫活動が始まり、1960年代半ばから1970年にかけて全国に広がった。またこの時期には「中小レポート」の刊行、日野市立図書館開館など日本の公共図書館の発展にとって重要な出来事が続いている。

表1 子ども文庫運動略史

年	子ども文庫をめぐる動向	
1951	道雄文庫ライブラリー開始（村岡花子）	黎明期
1952	クローバー子供図書館開始（郡山・金森好子）	
1953	児童図書館研究会設立	
1955	土屋児童文庫開始（土屋滋子）	
1957	家庭文庫研究会設立	
1958	かつら文庫開始（石井桃子）	
1960	母と子の20分間読書運動開始（棕鳩十）	萌芽期
1963	『中小都市における公共図書館の運営』刊行	
1965	『子どもの図書館』刊行 日野市立図書館開館	発展期
1967	日本親子読書センター設立（斎藤尚吾） 日本子どもの本研究会設立	
1969	ねりま地域文庫読書サークル連絡会設立 （東京都練馬区）	
	長流文庫連絡会設立（東京都調布市） 市川市子ども会文庫担当者連絡会設立 （千葉県市川市）	
1970	『市民の図書館』刊行 親子読書地域文庫全国連絡会設立	

表2 子ども文庫数の変化

年	1958	1969	1970	1974
数	60	160	265	2064

出典：全国子ども文庫調査報告書（1995年，p.9）

発展期の発端となったのは1967年に発足した日本親子読書センターである。主宰者の斎藤尚吾は文庫運動を全国的に広めるために地道な活動を展開した。機関誌『親子読書運動』には全国各地の読書グループや文庫の様子が紹介され、子ども文庫運動の拠り所となった。1970年には親子読書地域文庫全国連絡会が発足した。読書会を中心とする活動と機関誌『子どもと読書』（旧誌名『親子読書』）が子ども文庫関係者の交流の場となり、全国レベルでの文庫活動の推進に大きな役割を果たした。

発展期には個別に活動してきた文庫が、連絡組織を通じて結びつき共に文庫のあり方を探るようになっていった。また文庫運動は徐々に図書館設置運動へと広がりを見せはじめ、1970年代を迎えて本格的な図書館設置運動が展開された。

### 3. 子ども文庫と公共図書館の位相

子どもをとりまく貧弱な読書環境を打ち破るためにまず自らの手で文庫という場所を確保し、さらに公共図書館設置へ向けての取り組みへと段階的に運動を続けてきた文庫関係者の働きかけは、今日の公共図書館のあり方に強い影響を与えた。

一方、初期文庫運動から40年以上が経過し公共図書館サービスが1960年代から飛躍的な発展を遂げたにもかかわらず文庫はその役目を終えることなく、日本独自の文化施設としてその活動を続けている。各地に根づいた文庫の存在は、文庫を公共図書館との関係のみからでなく、コミュニティの読書環境を視野に入れたより広い射程からとらえていくべきことを示唆している。

ところで、子ども文庫と公共図書館の関係性をめぐる既存の議論を整理すると次のようになる。  
 (1) 文庫は公共図書館の業務を肩代わりしている。  
 (2) 文庫と図書館は協同関係にあって補完的に機能する。  
 (3) 文庫には独自の機能があり、公共図書館の代替物ではない。先行研究は、子ども文庫

の発展がわが国の公共図書館の基盤の弱さに起因するものであったことを認めつつも、(2) および(3) の見解を支持してきた。特に(3) について同じ地域の図書館は文庫の存在を脅かすものではないことが実証的に明らかにされている<sup>13)</sup>。

文庫の独自性については、文庫運営者(母親)と利用者(子ども)の濃厚な人間関係<sup>14)</sup>や図書提供にとどまらない娯楽を含む幅広い活動から説明されてきた。しかも個々の文庫はすべて異なる独自の活動を展開している。末廣が指摘するように多様性こそ文庫の特徴であり<sup>15)</sup>、その多様性は単に活動の幅にとどまらず、設置の目的、活動理念といったレベルに及ぶ。公共図書館とはまったく異なる運営理念によって子ども文庫は成立している。

いずれにしても先行研究は図書館の存在に拠って子ども文庫をとらえ、目標とするにせよ批判するにせよ常に図書館の存在を自明として進められてきた。そうした立場からいったん離れ、文庫という場所をコミュニティの読書空間にあって独自の位置を占めるオルタナティブな文化拠点と認知する見方を本研究では提起したい。コミュニティの読書空間はそうした複数の要素の緊張関係として成立している。コミュニティ全体を視野に入れ、両者の不規則な交渉関係を見ていくことで、文庫と公共図書館のいずれに対しても新しい意味づけを与えることが可能になるのである<sup>16)</sup>。まず取り組むべき作業は文庫それ自体の存在意義を明らかにすることであり、次章でそのための分析視角を検討する。

#### 4. 初期子ども文庫をめぐる論点

本章では公共図書館設置運動開始以前の文庫のオリジナリティを明確にするために手がかりとなる3つの論点(1) 既存の読書運動との連続／断絶、(2) 石井桃子の『子どもの図書館』の影響、(3) 文庫を担った母親のとらえ方を提示する。

##### 4.1 既存の読書運動との連続／断絶

まず1960年代から1970年代の子ども文庫とそれ以前の読書をめぐる運動の関係を考えてみたい。1951年の長野県立図書館のPTA母親文庫、

1955年以降の悪書追放運動や、1960年代の「母と子の20分間読書」など既存の読書運動は、子どもと本のあるべき姿を追求するという基本理念において子ども文庫活動の歴史的・社会的背景としてとらえられてきた<sup>17)</sup>。

だが一方で子ども文庫活動は都市部の母親によって展開された新しいタイプの運動であることも指摘されてきた<sup>18)</sup>。文庫運動は顕在化しはじめた多くの社会運動の高まりと重なっており、文庫活動もそうした時代の影響を濃く受けると同時に、文庫活動自体が同時代の社会運動の潮流を形作った。文庫運動は日常生活に根ざした同時代の社会闘争の新たな方法として展開されていた面もある<sup>19)</sup>。

こうした状況を考慮すると、既存の読書運動を一括して子ども文庫運動の背景として論じることには、子ども文庫の社会運動としての性格を曖昧化する危険性を持つことになるだろう。さらに全国に広がった文庫活動は都市部、農村部といった単なる二分法では説明しえない多様な状況を呈していた。全国各地のコミュニティで同時代に生じた子ども文庫運動が、それまでの読書運動とつながりがあったのか否か、つながりがあったとすればそれは具体的にはどのようなものだったのかという点についてはまだ明らかになっていない部分が多い。すなわち子ども文庫と既存の読書運動の連続／断絶の問題は、個別の状況に踏み込んで検証しなければならない課題として残されている。

##### 4.2 石井桃子『子どもの図書館』の影響

2番目の論点は1965年に刊行された『子どもの図書館』の影響である。同書は、児童文学者石井桃子が自宅に開設した私設文庫の活動記録である。多くの母親が文庫活動をはじめめるきっかけをつくり文庫関係者に読み継がれてきた<sup>20)</sup>。

『子どもの図書館』は、子どもと本を結びつけるという行為が実際にどのように行われるのかを詳細に描いた内容が支持され、文庫作りの指針となった。またその影響力の強さは同書への批判を生み出す結果ともなった。たとえば子ども文庫を増やすことではなく図書館を増やすことが重要であるとの石井の主張は<sup>21)</sup>、初期には公共図書館設置運動への論拠として支持されていた。しかしな

がら一定数の公共図書館が設置されるようになると、この主張は文庫を図書館の補完的施設としてみなしているという理由から批判されることになる。また石井が文庫をあくまでも良書の提供の場とし、文庫でのさまざまな行事を否定的にみている点にも批判が寄せられた<sup>22)</sup>。

だがそもそも『子どもの図書館』は石井が自ら運営する個人的な文庫の実践記録であり、文庫活動のテキストとして書かれたものではない。上記の批判は、『子どもの図書館』が私的な活動記録の報告という存在を越えて日本の子ども文庫活動の実践を先導し、結果的にはテキストとして批判されたというねじれを示している<sup>23)</sup>。

実際には初期の子ども文庫活動が『子どもの図書館』という優れた実践記録を模範としたことは、その後の子ども文庫のありかたにきわめて重要な役割を果たすことになった。石井は1954年から1955年にかけて欧米の児童図書館員や児童図書編集者と交流し児童図書館を見学している<sup>24)</sup>。そしてこの時の体験がかつら文庫での実践へと移されたからである。翻訳者および編集者として児童図書出版に直接携わっていた石井にとって、子どもはどんな本を好むのかという点が最大の課題であり、文庫活動はそれを探るための試みであったと自ら記している<sup>25)</sup>。児童図書の選書には細心の注意が払われ、実際に選ばれた本が子どもたちによってどのように読まれたかという点について石井は実に細かい記録を取っている。また欧米諸国の翻訳図書を提供したほか、未邦訳の児童図書を石井が翻訳しながら読み聞かせを行って子どもたちの反応をみることもあった。かつら文庫は児童図書の作り手による児童図書サービスの実験室であったのである。

初期の文庫活動の指針となるものは『子どもの図書館』以外には、他の文庫の活動を除けばほとんどなかったこともあり、母親たちの多くは同書を手がかりに文庫活動を行っていくことになった<sup>26)</sup>。そしてかつら文庫に主宰者石井の欧米での児童図書館にかかわる経験が反映されていたことにより、初期の子ども文庫はかつら文庫を通じて間接的に欧米の児童図書サービスを摂取することになった。児童文学者が記した私的な文庫の記録を、運動の担い手となった母親たちはどのように

受容し、自らの活動に投影させていったのかという点についても詳細な検証が必要である。

### 4.3 母親の学びの場としての子ども文庫

文庫という場所が単に児童図書の提供のためにだけ存在していたのではなく、他者とのコミュニケーションや外部への働きかけを通して母親が成長する場所であったことは、すでに先行研究の多くが指摘している<sup>27)</sup>。また文庫活動に携わる母親たちが市民としての自覚をより明確に意識し、自らを取り巻く文化的環境について学習を深めていった結果として、文庫運動は市民運動としての広がりを持つようになった<sup>28)</sup>。

母親の成長を指摘する先行文献の記述は、文庫の担い手となった母親に焦点を当てている点で重要であるとはいえ、ここでの母親の姿は、「こどもとよい本を結びつけ自らを成長させる」というモデルにとどまっている。「子どもへの良書の提供」は確かに文庫活動の基盤を支える理念である。しかしこの運動を支える力となっていたのはそうした理念だけではないだろう。初期の子ども文庫活動に関わった母親の中には、文庫をはじめの前から社会に対する強い問題意識を持ち、それを子ども文庫という場で主体的に表現していった者が少なくなかったのである<sup>29)</sup>。

地域での文化運動の担い手の主体形成に関してはすでに吉村の事例研究がある<sup>30)</sup>。ここでは活動の担い手が多様な問題を抱えこみつつも、これらの活動とともに社会的意識を養い市民として成長していることが検証されている。しかし吉村の場合、視点はあくまでも「専業主婦の発達」に置かれそこに影響を与えた要因として文庫活動や親子劇場という地域活動が選ばれている。一方、文庫研究では文庫に対して吉村が与えたような社会的視点は抜け落ちており、記述の力点は日々の活動に置かれ、活動記録の断片に活動者の主体形成に関してわずかな言及がみられるのみである。子ども文庫運動の解明のためには、活動主体の社会的意識と日常実践を往復するような分析視点が必要なのである。

さらに重要なことは、母親の社会意識の芽生えが文庫を媒介にして生じたのか、あるいは最初から存在していたのかという問題よりも「母親た

ち自身のための文庫活動」という視点を子ども文庫研究に意識的に持ち込むことにある。そうすることによって文庫に携わっていた母親は「子供と図書を結びつける媒介者」という単調なモデルではなく、文庫を自ら生きる主体的存在として浮かび上がってくるのである。文庫が公共図書館設置運動を経て図書館に編制されてしまうことなく存続した理由の一つを、運営者の自己表現の場として文庫という観点から解明しうる可能性が充分にある。

また文庫の担い手が母親＝女性であったことは、コミュニティの読書にかかわるジェンダーの役割という観点からも考慮すべき要素である。文庫は日本固有の文化運動として発展したものの、文庫活動を担った女性のあり方は、アメリカにおいて19世紀後半に図書館運動に参加した女性と強い類似性を持つ。マローンはアメリカ女性が19世紀後期に無償労働という形で図書館設立運動にかかわっていたことを指摘している<sup>31)</sup>。さらにマローンは、アメリカ女性の図書館設立の動機について、読書による教養の引き上げにかかわる「利他的な願望」を挙げながら、同時にそこには「自分たちのためという動機」が表れていると指摘している。女性は自らの知的欲求を表現できる場所として図書館という空間を求めたのである<sup>32)</sup>。アメリカで図書館活動に積極的に関わった女性クラブが「公的領域への女性の参加を制限する境界線を内側から広げていった」<sup>33)</sup>様子は、子ども文庫の母親が文庫活動を通し自らの領域を少しずつ押し広げていった状況と酷似している。公共図書館サービスとの関係だけで文庫をとらえようとすると、母親たちの表現媒体としての側面は薄れてしまう。読書にかかわる女性固有の日常実践という観点からみていく必要がある。

## 5. おわりに

前節で提示した3つの論点は、いずれも初期子ども文庫運動の基点にかかわるものであり、これまでもそれぞれの論点に対し賛否両論を含む多数の言説が生成されている。そしてそれらが繰り返して現れることにより、子ども文庫活動を規定する枠組となった。しかし3つの論点にかかわる多

数の言説は必ずしも検証を経たものではない。

多くの文庫は図書館設立の後もコミュニティの読書拠点として存続することを選択した。なぜ公共図書館があるにもかかわらず文庫という場所を確保しようとし続けるのか、この理由を解明していくためには、文庫がいかなる場所であったのかを文庫活動の出発点に立ち返り分析する必要がある。子ども文庫の存立基盤にかかわるこれら3つの論点はそのための手がかりとなるのである。

日本の読書空間の厚みと広がりを検証するためには、公共図書館をあくまで一部に含むコミュニティの文化施設やメディアの布置を検討し、コミュニティの読書空間を総合的にとらえる理論基盤を構築する必要がある。読書にかかわる個々の制度のなかでも子ども文庫はその独自の歩みと活動の展開を再検証すべき重要な位置づけにある。

文庫の特質を図書館サービスから説明し解釈するのではなく、逆に文庫活動から公共図書館サービスを照射し公共図書館サービスを問い直す、そういった可能性を持つ場として子ども文庫はもう一度とらえなおされるべきだろう。外部から公共図書館に対して投げかけられた問いに答えていくことは、公共図書館の存在を再考する契機ともなるからである。

今回は子ども文庫研究に必要な論点を抽出し、研究を進めるうえで新しい視点と方法を持ち込むことを提起した。今後この新しい枠組みを用いて文庫にかかわった母親、文庫の利用者の特徴を分析し、コミュニティにおける子ども文庫の位置づけを明らかにしていきたい。

## 謝 辞

本稿をまとめるにあたって、査読者の方から貴重なアドバイスをいただきました。ここに記して感謝の意を表します。

## 注・引用文献

- 1) 日本図書館情報学会用語辞典編集委員会編『図書館情報学用語辞典』第2版、丸善、2002、p. 35, 142.
- 2) 全国子ども文庫調査実行委員会編『子どもの豊かさを求めて：全国子ども文庫調査報告書』日本図書館協会、1984、p. 37.

- 3) 全国子ども文庫調査実行委員会編『子どもの豊かさを求めて：全国子ども文庫調査報告書』日本図書館協会，1984，p. 6.
- 4) 全国子ども文庫調査実行委員会編『子どもの豊かさを求めて3：全国子ども文庫調査報告書』日本図書館協会，1995，p. 9.
- 5) 高橋樹一郎「子ども文庫の現状」『日本経済新聞』（2004年1月16日夕刊）
- 6) ①全国子ども文庫調査実行委員会編『子どもの豊かさを求めて：全国子ども文庫調査報告書』日本図書館協会，1984，59p.  
②全国子ども文庫調査実行委員会編『子どもの豊かさを求めて2：全国子ども文庫連絡会等調査報告書』日本図書館協会，1989，40p.  
③全国子ども文庫調査実行委員会編『子どもの豊かさを求めて3：全国子ども文庫調査報告書』日本図書館協会，1995，118p.
- 7) 「子ども BUNKO プロジェクト」を担当する高橋樹一郎氏からの聞き取りによる。（2003年3月19日）
- 8) 以下の文献にこれまでの調査状況がまとめられている。  
①小木曾眞「名古屋市内のこども文庫：1990年度調査から」『図書館界』vol. 44，no. 3，1992，p. 120-129.  
②小木曾眞「名古屋市内の子ども文庫」『中部図書館学会誌』vol. 38，1997，p. 21-36.  
③小木曾眞『『名古屋文庫のつどい』の30年』『中部図書館学会誌』vol. 42，2001，p. 37-50.
- 9) 子ども文庫と公共図書館設置運動に関する文献リストとして次の2点が有用である。  
①西田博志「文庫活動」『図書館界』vol. 36，no. 5，Jan. 1985，p. 379-385.  
②小木曾眞「子ども文庫と図書館」『図書館界』vol. 45，no. 1，May 1993，p. 189-195.  
また次の博士論文は子ども文庫をめぐる多様な側面を包括的に扱っている。Hotta, Ann Miyoko, *Children, Books, and Children's Bunko: A Study of an Art World in the Japanese Context*. (PhD. University of California at Berkeley) Ann Arbor: UMI Dissertation Services, 1995, vii, 293 p.
- 10) 全国子ども文庫調査実行委員会「調査の視点と『子ども文庫』という言葉」『こどもの図書館』vol. 32，no. 1，1985，p. 2-5.
- 11) ウィーガンは図書館を自明の存在とし，常に図書館を中心に研究対象を分析していこうとする姿勢が，図書館研究の視野を阻めてきたことを指摘している。Wiegand, A. Wayne. "Broadening our perspectives," *Library Quarterly*, vol. 73, no. 1, Jan. 2003, p. v-x.
- 12) 石井桃子『子どもの図書館』岩波書店，1965，p. 7-9.
- 13) 前掲6) ③，p. 32-33.
- 14) 中川徳子「まだ文庫はやめられへん」『みんなの図書館』no. 20，1979，p. 30.
- 15) 前掲6) ①，p. 37.
- 16) こうした構図は社会的実践にかかわる文化政治学的視座を投入することによって，いっそう明確に規定することができる。吉見俊哉『カルチュラル・スタディーズ』岩波書店，2000，p. 1-32. 吉見俊哉『カルチュラル・ターン，文化の政治学へ』人文書院，2003，p. 42-89.
- 17) 既存の読書運動と子ども文庫活動の関係性については，次のようにあいまいに表現されている。「親子読書を自ら体験した母親たちのうち，一部の人たちは，より多くのこどもに読書のよろこびを与えたいということで，家庭文庫あるいは地域文庫をつくりはじめる。もちろん文庫をはじめた人のすべてが，親子読書運動の洗礼を受けているとはかぎらない。……文庫をはじめた人たちの相当数が，この経験をもっているのではないかと想像される」森耕一「図書館運動における市民参加への道程」『図書館界』vol. 28，no. 2/3, Sept. 1976，p. 103.
- 18) 森は上記の論文で読書運動と文庫運動の相違について同時に指摘している。「この地域文庫運動を，さきの読書普及運動と対比してみると，いろいろの点で相違している。……図書館がイニシアチブをとったものではない。運動の主体は親（おもに母親）である。……こどもの読書のことを活動の中心にすえている。……この運動は，都市型の運動である」同上，p. 103-104.
- 19) 金子れい子「子ども文庫考：すすく親子文庫をとおして」『青少年問題』vol. 30，no. 9，May 1983，p. 13.
- 20) 名古屋市でも1971年の段階で文庫活動のきっかけとして例外なく『子どもの図書館』が挙げられていたことを指摘している。小木曾眞「子ども文庫と図書館」『図書館界』vol. 45，no. 1，May 1993，p. 189. また辰巳は同書が購買者層の厚い岩波新書として出版されたことが大きな影響力を持ったと指摘している。辰巳義幸「児童に対する図書館サービス」『図書館界』vol. 28，no. 2/3，1976，p. 79-80.
- 21) 石井は同書の「子どもの図書館」という章で，公共図書館と児童図書サービスの必要性を強く主張した。石井桃子『子どもの図書館』岩波書店，1965，p. 183-218.
- 22) 小木曾は『子どもの図書館』の文庫活動への影響力を高く評価した上で，その時代的制約として2つの論点を挙げている。まず1つに文庫は良書によって子どもをひきつけるのであって，行事はおはなしを除いて必要ないというものである。小木曾は「子どもの生活が変わり，地域での子育てを考えねばならなくなった時点でかえって必要となってきた」と指摘する。もう1つ

- の論点は文庫活動は行政主体であるべきだという点であり、これに対しては「公立図書館作り運動への子ども文庫活動関係者の参加を示唆し、全国的な運動が高まったが、ある程度公立図書館が普及した時点で、子ども文庫がどうすべきか考える課題を残した」と指摘している。しかしそれでもなお『子どもの図書館』が、「子ども文庫活動を考える上での原点になったと言えるだろう」と同書の影響力の強さについて述べている。前掲20), p. 191-192.
- 23) 『子どもの図書館』への批評の焦点は、同書のかなりの部分を占める児童図書リストの内容ではなく、補足的に論じられた図書館にかかわる部分に集中していた。
- 24) 石井は1954年から1955年までロックフェラー財団奨学金で渡米し、全米各地の公共図書館と児童図書出版社を訪問した。また1955年の1月から4月まではピッツバーグのカーネギー・ライブラリー・スクールの聴講生として児童文学の集中講義を受けている。石井桃子『石井桃子集6：児童文学の旅』岩波書店，1999，v，317p.
- 25) 石井自身は文庫を開いた最大の動機を「子どもと本を一つところにおいて、そこにおこるじっさいの結果を見てみたい，と思った」からであると述べている。前掲21)，p. 4.
- 26) 「店開きはしたもの、当時は何をどうしてよいか知恵もなく、相談する人もなく……石井桃子氏の本『子どもの図書館』だけが唯一の頼りだった」という発言からも明らかである。栗山規子「家庭の片すみから広がった文庫運動：大沢家庭文庫のあゆみ」『月刊 社会教育』vol. 18, no. 9, 1974, p. 21. また次の発言は、『子どもの図書館』に描かれたかつら文庫が図書館とまったく異なる印象を与えていることを鮮明に表現している。「……私を迎えてくれたのが、ほかでもない石井桃子さんの『子どもの図書館』（岩波）でした。図書館に冷たい固くらしいイメージしかなかった私に，“かつら文庫”の姿は何か夢のようでしたが、あの楽しい絵本たちを子どもにひきあわせる、文庫の仕事は、これまで探し求めていたような、なんとしてもやってみたい魅力的なものでした。」永尾照美「こぼとは子どものお城です」『季刊 子どもの本棚』no. 27, 1979, p. 160.
- 27) 広瀬恒子「文庫活動の10年」『月刊 社会教育』vol. 23, no. 13, 1979, p. 59. など
- 28) 京都子どもの本連絡会「ひろがる京都の子ども文庫と母親の学習：『子どもの本の学校』」『月刊社会教育』vol. 19, no. 11, 1975, p. 36-37. 小河内芳子『児童図書館と私：どくしょのよろこびを下』日外アソシエーツ，1981，p. 20, 広瀬恒子「こども文庫活動と戦後50年」『図書館雑誌』vol. 89, no. 8, 1995, p. 602-603.
- 29) 市原正恵「家庭文庫を八年：子どもたちの変化」『思想の科学』No. 103, 1979.4, p. 32. 樋口てい子「どこまで自分たちでやるのか？：文庫活動を通して地域を考える主婦」『月刊 福祉』vol. 60, no. 3, 1977, p. 19.
- 30) 吉村恵「地域活動と専業主婦の発達：寝屋川市，親子劇場および子ども文庫リーダー層の事例研究をもとに」『立命館産業社会論集』42号，1984，p. 81-119.
- 31) Malone, Cheryl Knott『アメリカ図書館史に女性を書きこむ』[*Reclaiming the American Library Past: Writing the Women In*] 田口瑛子訳，京都大学図書館情報学研究会，2002，p. 318.
- 32) 同上，p. 318. マローンは図書館活動への参加動機について「より広い世界に貢献していないという罪悪感で，家庭にとどまっている母親，とくに大学出で，何か結婚と子育て以上のための訓練を受けた者たちには，無給の仕事に駆り立てられる者もいたのである」と述べている。同上，p. 328.
- 33) 同上，p. 321.



## A Re-examination of the Bunko Movement of the 1960s and 1970s

Yuko YOSHIDA

*Graduate School of Library, Information and Media Studies**University of Tsukuba*

The paper tried to analyze bunko movement of the 1960s and 1970s. Bunko was started by mothers who hoped to improve their children's reading environment. It developed a movement for establishment of public library in the community soon. After that, bunko continued their activities as a unique cultural movement in Japan. More than 3,000 bunko have been established as children's book service points in Japan. This paper surveys the history of bunko during three periods. It is also considered relationship between bunko and public libraries. Although a large number of studies have been done on this subject, their primary focus is on the range of library service. This research will examine how the community reading environment is reflected in the bunko research. The results of this study identified some important points for the future direction of bunko research, by extracting relevant material from previous studies. These points were: (1) Continuity/non-continuity with the existing reading movement; (2) Influence of *Kodomo-no-toshokan* (*The Children's Library*) written by Momoko Ishii on bunko; (3) Aspect of mothers who run bunko.